

週日の説教

金 大烈 神父 2009年3月24日(火)

《私たちの信仰は、一緒に歩む道》

今日の福音(ヨハネ 5・1 - 3a, 5 - 16)では、38年間体を動かさなかった人が、癒しの奇跡が起こると言われている池の前の回廊に横たわっています。それをご覧になったイエス様が、長い間病気で苦しんで来たその人に「丈夫になりたいか。それならば床を担いで歩きなさい。」とおっしゃいます。その情景を想像してみましょう。

「水が動くとき、最初にその水に入ると天使達が降りてきてその人を癒してくださる。」という噂がずっと以前から伝えられてきた池です。そこにはたくさんの体の不自由な人々が集まり、池の水が動くかどうか真剣に見つめていたでしょう。そして風が吹いて池の水が動くと、自分が先に入ろうとしたのでしょうか。しかし、体の動かない人は、自分では池に入ることができません。更に悲しいことは、38年間、この人に憐憫の情を感じて運んであげた人が誰もいなかったということです。そんな非情なことがあるかと思うかもしれませんが、よく考えてみますと、それが今の時代の私たちの姿ではないでしょうか。私たちは、まず自分がよくなりた、次に自分の身内がよくなってほしい、全部かなって余裕があれば他の人にあげてもよい、という考え方で生きているのではないのでしょうか。イエス様は結局、一番条件の悪い人を選びました。そしてその人を立たせて行かせてあげました。

今日の福音を読んで私たちが考えなければならないことは、普通の人々ならば、まず自分のことを考えるようなとき、イエス様に教えていただいた私たちは、死んでも一緒に死に、生きても一緒に生きる、という意識が何よりも必要だということです。さらに、私よりあなたが先によくなってほしい、という一段階上の考えが自然に生じる人ならば、その人はすでに天国にいるのではないかと私は思います。

二番目です。信仰というのは待つものだ、ということを考えて欲しいのです。日本語の表現に「待ち望む」という言葉がありますね。素晴らしい言葉です。ただ待つのではなく、望みながら待つのです。信仰というのはそのように望みながら待つことだと思います。

「神様はきっと私を救ってくださる。一番よいことを私にしてください。今は何も見えない。わけも分からない。何が正しいか、何が悪いかも分からない。自分の持っている考えが正しいかどうか、それも迷ってしまう。しかし、必ず正しい道を選びたいという心を持っているのだから、あなたが正しく導いてくださると私は信じます。」そういう心があれば、それは必ずかなえられると私は信じます。これが信仰ではないでしょうか。間違いがあっても、本当に悔い改めることができれば、神様は赦してください、という待ち望む心が信仰ではないかと、今日の福音をとおして考えてみました。

皆様、私たちの信仰は、自分中心になってはいけません。信仰というものは、その言葉自体、開いているものなのです。一方向に執着して、自分中心になってしまうものではありません。神様と自分のことを考える時に、まず神様のことを優先するのならば、隣の人との間でも自然に自分のことより先に隣の人顔が浮かんで来るものだと思います。私たちの信仰は、共同体の信仰です。一緒に歩む道です。そして少し苦労があっても寂しくない道です。それが一番理想的な道ではないかと思ってみました。

ありがとうございました。